

## アメリカにおける現代思想と宗教(下)

佐々木 現 順

テイーリッヒ教授の仏教への関心は長年仏教に従事してゐるその Hannah 夫人によつて強められたと言つても過言でない。夫人は宗教学や私の仏教講義にも参加し逐次テイーリッヒ博士に内容を報告していた。そのため私も屢々先生との質疑応答の機会に恵まれ、公私共に先生の知己をうる事が出来た。先生は夫人により仏教への関心も高めて行き、一九六二年秋にはインドへの旅行を準備するであろう。博士来日の時、限られた一部のグループを通して興へられた仏教観は多くの点で反省せられ変革されて行つた。この点、日本側の極度に限定された受入れ態勢にも考慮の余地があるのでないか。先生の教育学の公開講演中、日本に關説し、日本人が、一切のものに「聖なるもの」を感じとる能力を持つと讚美し、

アメリカはそれを教育上學びとるべきであると力説された。併し、日本へ輸出すべきは神の愛ではなくして、ゴスであると言う時、孤高を尊しとする日本の一部への強い批判と人口過剰から来る學界、世相のある種の混乱への批判を含めていた。先生の所謂「聖なるもの」がその哲学に於ける the divine の概念に通ずるものであることは言うまでもない。

古典音楽からジャズまでも解する豊かなヘルツを持つる先生は又、現在の社会政治についても驚くべき知識と鋭い批判を持つてゐる。先生の政治的言動がアメリカで深い注意で見守られている。一九六〇—六一年度講義は凡て、又ドイツで再会の時、なされた講義の若干を私は先生の依頼で録音し持ち歸れたが、尽きせぬ追想のよす

がとなろう。アメリカより渡欧出講せられた先生とのハ  
ンブルグ大学での会合は丁度思想をそのまま生きていた  
ソクラテスに会う如き重厚な感応を覚えせしめた。

テイリッヒの仏教への関心は禅ではない。却つて現在  
は東洋思想の一環としてこれを眺め、その源泉をインド  
にまで遡らんとするところに新しい方向が見られた。こ  
の関心の方向は禅を哲学思想としてとりあげようとして  
いる哲学者(極少数だが)のアプローチと相違したもので  
ある。哲学特にプラグマティズム或は科学と禅とを共  
同の地盤で取扱つている教授は先にもあげた V. M. A-  
mes (Cincinnati Un.) であり、近く出る著、Zen and  
American Thought も、プラグマティズムと禅に關説  
したものであると自ら言われた。禅はプラグマティズム  
の与えなかつたものを与えねばアメリカに育つまい。ア  
メリカ哲学たるプラグマティズムとの比較或は一致点の  
みの認識ではアメリカにとつて何の文化をももたらさな  
いであらう。

エール大学もハーバードと同じく東部の地域的性格と  
文化的保守性を脱していないが、ハーバード所在地ケン  
ブリッジと違つて大学外への一般市民の協力的態度はハ  
ーバードの比ではない。

これは外国人学生がハーバード程に多数でないことと  
ニューヨークのリゾート・プレスでもあるためか誠実  
・実直な田舎らしいニュー・ハーベン町の特徴でもあら  
う。大学自体にもこの空気がある。それは大学の方針が  
創立(一七〇一年)以来、学問的研究と小さなカレッジ  
の地域的社会的アトマスフェアとを結合せしめること  
にあつたという伝統によるものであらう。

インド学は比較言語学の P. M. Tedesco が、ギータ  
ー、グラフィマナ、ウパニシャッド、ドラマ、エピック、パー  
リ語、イラニアン、及び仏教梵語の講義をなし、Wells  
が梵語初歩を教えている。Tedesco の語源学的研究は  
最近の "Sanskrit unch' to glean"; "Notes to May-  
rhofer's Etymological Sanskrit Dictionary" 等の批判  
論文に示されている。それは広範にわたるだけにこれに  
対するロンドン大学 Brough 教授の厳しい再批判も聞か  
れた。ルーマニヤ人の Tedesco は人なつこしい人で、  
全く研究室外に出ない生活にあけくれ、かなりの疲労が  
見うけられた。彼と共にエールで最も学的業績をあげ、  
豊かな学殖を持つる教授の一人は J. Rauber であら  
う。教授はチベット、中国、日本の文学、文学史、言語  
及ば仏教大学、蒙古文学を講じ、特に言語学を通じてそ

の文化史的背景に重点をおいている。多くの諸雑誌論文は不断の業績を示している。彼の一九五六一一九六〇にわたる一連の研究たる *Eymological Vocabulary of Japanese, Korean and Ainu* は、つとに世界学界の注目するところである。博士もなほ全力をこれに尽し又、トルコ語文献にまで研究範囲を伸ばしつつある。又、博士は Ph. D. プログラムのためには仏教哲学を講じ梵文ランカバタラストラーを読んでいる。一日必ず十五時間間は勉強するといはれたが、その努力と博学強記な学識は彼の篤実な性格と相俟つて多くの信望を集めていた。インド、仏教に関するものとして東南アジア研究で有名な Mus が *Brahmanism and Buddhism, Indian Art: Its Philosophy and Political Influence in South East Asia* の講義を大学院で行つている。チベット断簡及びライの書簡等からなる歴史上重要な文献は Wesley E. Needham が整理にあたり、又、チベット学匠 Kalnuk Morgal 出身の Geshe Wangyal が毎夏ニューヨークより来て加勢している。彼はチベット史研究の米人 E. Bernyer 夫人を秘書としてニューヨークで研究会を開いている。最近、エール大学は E. R. Meiss 講師よりチベット宗教の最高女神 Green Dolma の仏画をえた。

Tanka は百年前のものでシルクにかかれ偉れた仏教アイコングラフィの一つであつた。これはエール大学にとつて最も貴重な資料を新しく加えたことになる。

エールが他の大学と相違している点は東南アジア、チベット人自らによる自国の文化研究をすすめている点である。次に、東西比較哲学で有名な F. S. C. Northrop は法、倫理、自然哲学及び哲学の人間学、比較倫理学等の広範にわたる研究を続けている。コロンビア大学では A. Zigmund-Cerbu が梵語及び仏教に関する講義をなし、又、語学部では Peter Lee が仏教とコレアンをやつている。しかし、図書館に於て、一層の資料の充実が期待されている。エールを出た羽毛田氏が一九六一年より研究に加はつた。

ペンシルバニア大学より、既に南部アメリカの地域的性格が著しく現れクエーカー徒の活躍、工業の南部への移動人種の問題等が台頭し、アメリカではローカル、カラーに豊んだ地域であるといはれる。この大学には Sanderjalhari の著者 W. N. Brown のインドの言語学研究を初め、若干の若い研究者がおり、それについてはアメリカ東洋学会の項で既に一瞥した。

アメリカ東北部は気候の変化が激しく、又、行動も積

極性に豊んでいるといわれる。学問的関心は古典よりも現代研究に向けられているが、これも地域的文化的性格と無縁ではないであろう。例えば、シカゴ大学で企画されている宗教社会学のプログラムもその一例である。こゝから Eliade, Kiagawa, C. H. Long の編纂となる *History of Religions (International Journal for Comparative Historical Studies)* が一九六一年より出版され始めた。シカゴ大学では神学部の中の宗教史学科で社会、民族、心理学等の諸立場からインド及び仏教が問題となっている。アメリカで注目すべき民族学者の一人 Mircea Eliade はインド学研究でも大きな影響を与えている。その著 *The Myth of the Eternal Return, Birth and Rebirth; Yoga: Immortality and Freedom* 等は各国語に訳され、又、特殊問題に関する諸種の論項の中、最新の論文 *Spiritual Thread, sutratman, catena aurea (Paideuma VII, 1960, Heft 4/6, Wiesbaden)* はチャット・インドの神話から仏教の業論に及び興味深い。彼は講義として 'Celtic, Scandinavian, and Bato-slavic Religions; Problem of the High-God; Types of Initiation; Recent Trends in the History of Religions' を出し、又、仏教哲学・大乘・日本仏教は北川教授が

担当している。インド学は Indian Civilization 部門に属し、サンスクリットは G. V. Bobrinsky と J. A. B. van Buitenen が講じ、E. C. Dimock はインガリ一文学、S. N. Hay は歴史、M. G. S. Hodgson は社会科学、M. Weiner は政治学及び M. L. P. Patterson はインド文化学をそれぞれ講じている。シカゴは現代研究に重点をおいている如く見えるが、一般にインド研究に於てはハーバードと共にアメリカに於ける重要な研究所の一つである。なお極東諸学部には E. McClan (日本) H. G. Creel (中国) R. A. Bowman (東洋語学) E. A. Kracke (中国中世文学) 等がいるが、この部には仏教は属せず、専ら神学部に属している。これはハーバードの仏教が神学部とインド学部の両方に属し、ロサンゼルス大学では極東学部のみ属しているのと較べてアメリカに於ける行政上の仏教学の中間的在り方をも示唆している。

その他シカゴにはユニテリアンで世界的に有名なブレストン・ブラッドレー或はユダヤ教のルイス・マンなど大学講義以外の活動にもたづさはつている宗教学者がいて、大学外の宗教活動は多彩である。

仏教に関して特殊の Ph. D. Program を設けて発足

した大学にヴィスコンシン大学がある。後述の如く、アメリカに於て仏教学が他の諸講座の中で占める位置は微妙なものであるが、その中で、このプログラムだけが仏教を表に掲げている唯一のものである。そのメンバーの中、

R. H. Robinson はインド学特に、初期大乘の論理中国文学、原始仏教と大乘經典の關係等、仏教学を中心とした研究にかかわり、中論の論理についての論稿も発表している。ロビンソンの数多くの論作の中で大乘大義章、起信論、*Avyakṛavastuṃ; The Soteriology of the Saddharmapuṅdarika* のテキスト研究論文等である。

R. J. Miller は人類学とインド学で、蒙古チベットに於ける仏教僧団及びインドのトライブの社会的經濟的役割を講ずる。彼は一九五三—五五年に行われたヒマラヤのチベット人研究を指導した人類学者である。J. F. Kientz は極東美術、特に美術論と仏教のアイコノグラフィに興味を持つている。言語学的インド研究とサンスクリットは、M. Fowler 中国語は Kuo-P'ing Chou 中国史・日本史は E. Boardman 東南アジアの人類学は M. L. Barnett、ボンデー及びカンナダ語は言語学者の W. M. Cornack、東南アジアの政治及びビルマに於ける仏教の政治的役割については F. R. von der Mehdien が講じ

ている。アメリカの大学に於て占める仏教学の中間的位置を考へる時、仏教学研究に独立した意味を与えようとするこのプログラムはヴィコンシンを最初としており、ヨーロッパにもその氣運を見ない漸新な企画である。

同じ中北部のシガン大学では J. K. 山際教授を部長とする日本研究所があり、インド、東南アジア研究もまたそれに属するスタッフによつてなされている。即ち Bardsley (極東及びインドネシテの工業・農業)、Remer (極東の經濟)、Anderson (極東・東南アジアの教育)、Loehr (仏教美術)、Plumer (インド、インドネシア美術、哲学)、R. B. Hall (極東の地誌) 等であり、この中、Plumer は 1929—30 ハーバードのエンチン研究所に於て、Hall は *Far Eastern Quarterly* の編集者として知られ、共に極東に於ける十六年の長期にわたる豊富な經驗を生かしている。シガンの日本語研究はアメリカに於ける指導的役割を果している。又、日本人としてアメリカでチェアマンのポストに在るのは山際教授のみであり、そのリファインされた人格は多くの信望を集めていた。彼には *Translations from Early Japanese Literature* (ライシヤワーと共著) 等多数の著書がある。次にここに一九六二年二月までチベット学の Wayman

がいた。ヴィスコンシン大学のロビンソンの不在中、ヴィスコンシンへ移る直前であつた。彼はインド仏教、チベットを講じてゐる。彼による最近及び出版予定の業績をあげておく。The Rules of Debate. According to

Asaṅga (JAOS, Vol. 78, 1. 1958); Studies in Yama and Māra (Indo-Iranian Journal. Vol. III, 1959, No. 1, pp. 44-73. No. 2, pp. 112-131), Totemic Beliefs in the Buddhist Tantra (History of Religions, Vol. 1, No. 1, 1961); 印刷中の『The Analysis of the Śrāvakaśāhūni Manuscript (California Publications, Classical Philology); F. D. Lessing and A. Wayman, Mkhlas Grub Rje's General Summary of the Tantras; The meditative (samtha) section of Tson-kha-pa's Lam-rim-Chen-mo (with introductory materials); Asaṅga's Heṅu-vidyā (Skt. text and English translation) 等であり、英子夫人の漢訳対照の分野に於ける援助と相俟つて多大の貢献をなしている極少数のチベット学者の一人である。

63 (佐々木)

なお、ミネソタ大学にはインゴールズ教授の門弟 Potter がサンスクリットを教えている。彼は Padartha-tattvanirūpanam of Raghunātha Sīromani の著者と

して知られている。序でながらカナダのトロント大学には専門学者としては Smith 教授のみありて、インド地誌及び歴史を研究しているが、若い数学者 B. Brainerd は仏教論理の数理哲学的研究をなしていた。

この他、東部に於ける大学附属の研究所即ちコロンビアの東アジア研究所、ハーバードの燕京研究所・ワシントン大学のアジア研究所・ブリテイッシュ・コロンビア大学のアジア研究部等は長い歴史と専門施設を持つた研究所であるが、訪問したこれら諸研究所の内容については限られた紙数のため凡て割愛せねばならない。ただプリンストン大学には唯識の韋達居士、及び Charles Luk がおり、一九六一年春より、カルフォルニア大学にいた K. Chen 教授がここに移り、世界宗教研究所のプログラムの中で仏教を講じてゐることだけ記しておく。

中部アメリカに入るとアジア研究への関心は東部・西部ほどではない。テネシー・ケンタッキ・ミズリー州等がバイブル・ベルトなどと呼ばれる様にキリスト教特異に、カトリック精神が地についていることと、如何なる国への文化的郷愁を持たない独立精神と闘争精神とが一つの原因であるといわれる。一般にインド・仏教研究は比較宗教研究の一端になつてゐる。オハイオ州のマイ

アミ大学では哲学特に論理学専門に Harris, Olson 又、宗教に Wickenden, Lushy がおり、比較宗教の一つとして仏教をとあげている。ここでハリス教授の世話になつて、オハイオからケンタッキへとオハイオ河をわたつた思い出もなつかしい。若き知識層の間に特に仏教への関心が高まりつつある。シンシナティ大学の哲学部長 Ames はフルブライト教授として来日した経験に基き、禅と科学の問題を講義、ハワイの東西哲学者会議等でも活躍し、その価値哲学よりの禅批判は高く評価されている。在日当時の印象と禅の論文を集めた *Zen and Japan* は文筆家の夫人との共著である。その他アーカンソ大学・テネシー大学等の東洋特に仏教思想への関心もこれに準ずる。見逃してならないことは米國に於けるチベット人の存在意味である。母國を追われた彼らはニュージャージーを中心とし、東はマサチューセッツ州の西北端にあるウイリアムス・カレッヂから西はシヤトル、南はワシントンに散在し、米國生活と余りに相違したチベットの生活・精神状況の間にあつて自ら苦悩すると同時にたくましい影響を与えていることである。アメリカ生活にとけこんでいる Tashi Tshering, G. Narbut 或は学匠 Geshhe Wangyal などがある。ハーバードのティーリッヒ博士

の求めて一日、その幾人かをハーバードの地に招き博士に多大の印象を与えた。彼らの異質的文化に対する包容性と順応性は回教徒・インド教徒の比でなく、本来的仏教の在るべき相を示唆していたかの如くであつた。

米國の西部は歴史的に洲としての發達はおそいが現在は東西哲学の交流地として地の利をえ、二十世紀初頭より始つた工業化の進展と相まつてアメリカでニューヨークに続く最新の設備をととのえた。アメリカの知的水準が東部によつて示されるとすれば現代アメリカの工業化は西部によつて代表されるといつても過言ではない。ここでは工業化が文化に先行している。シヤトルのワシントン大学の東洋部は充實の途上にあり、ロサンゼルスのカリフォルニア大学はパークレーと相まつて東洋学を充実している。カリフォルニアには R. C. Rudolph が中國文学、史学を担当している。諸論項の中、最も新しいものに *The Shih Chi Biography of Wu Tzu-hü (Orleans Externus, Jahr. 9, Hef. 1962)* がある。日本語學部の足利氏は講義として日本語・チベット・仏教学等を担当している。又、この大学は東洋に近い西部であるといふことと又、西部の經濟力、工業力の増大と相待つて最近非常な躍進を示している。現在の東洋学部に於ける

大学院コースに仏教・中国考古学を表面にかかげたP.H.D.コースが設定され講座の充実が期待されている。もしそうなれば仏教、中国学の専門コースはアメリカではヴィスコンシン大学とカリフォルニア大学の二大学となるであろう。ここに於ける学生の東洋への関心とそれらの数は他の諸大学に見られない広いものであつた。

スタンフォード大学はハーバードのエンチン研究所と共に中国文学の双壁の一つであるが、インド学は特設されていない。フルブライト教授としてインドから Murthi が来ていた。曾って来日したバルバラの Wiennpahl, Kaplan は哲学と共に禅仏教の研究をすすめてゐる。

オレゴン大学では東部で新興しつつある比較宗教学研究の気風と相まつて Bloom がハーバード大学院から移つて来て日本仏教の助手となつた。

今は詳略したが、メキシコ以南ラテン、アメリカの現代文化は東洋の現代宗教と無縁であるようである。国境エルパソからメキシコのクアレレス(Ciudad Juarez)町に入つた途端、余りにアメリカと異質的な文物に接して人は驚く。

そこにはインド北部をしのばせるような人馬の混雑した風物が展開する。しかし、どこともなく聞えて来たも

のはレオポールドの「ハンガリヤン」の調べであつた。

かくて近代都市メキシコに飛べば、十六世紀頭のス페인人侵入前に遡る。即ち近代的都市と同時に神々のねむつてゐる古代遺跡が砂漠に残り、附近にはラテン、アメリカのロマンテイシズムが漂つていた。カトリックで固められたメキシコは数々の今昔の思い出を胸にひそめながらも今は苦しい経済生活にしばらくつけられてゐるような印象を与えた。ヨーロッパのスベインのマドリードでもそうであつたようにここで宗教としての仏教を語ることはおそらく書かれざる筈によつて禁ぜられることであろう。

以上、アメリカに於けるアジア研究の動機と状況から類推しうることは、一般的に大衆のアジアへの関心がヨーロッパと比較して研究機関のそれよりも高いということ、及び研究機関が古典と現代研究という二つの領域に判明に区分されていること、又、仏教研究の占めるべき大学行政的位置付けが神学とインド古典研究との両方にまたがり、ここに極めてデリケートな幾多の問題をはらんでゐるということである。これらの傾向はヨーロッパに於けるそれとやや相違してゐると思ぜられる。ヨーロッパでは、アジアへの関心が研究機関に於て隆盛であ

り、而も主として古典に関はり、従つて、仏教はインド及び中国古典に属し、又、それが比較宗教の一部門として神学・哲学に属するという例は極めて少くない。

かかる仏教学の講義編成上のデリケートな問題は現在のところ中国学・インド学更に世界宗教研究所の講座という三種の講座にまたがつて配置せられている。これはヨーロッパの如く、言語学或は中国学だけの中に設けられていることと比較してアメリカの今後の行き方を示しているといえよう。世界宗教研究所のプログラムを持っている大学は前記の如く東部のハーバード、プリンストン・コルゲート等であるが、更にもう一つ追加したい。それは西部のクレアモント大学の Tee Blaisdell Institute である。現在 Herbert W. Schneider が所長をつとめている。この研究所より幾多の教授が海外へ出ている。日本へは Dr. Jon C. Covell が派遣され（一九六一—一九六二）仏教及道教の研究に従事している。Covell 博士は Under the Seal of Sesshu 等の諸著書を持ち、コロンビア大学・カリフォルニア大学の講師でもある著名な学者である。

招きをうけ米国より渡欧して、七月三十日—八月三日、ゲッティングン大学で開かれた第十五回ドイツ東洋学

会に出席した。本会は主として招待をうけたドイツを中心とするヨーロッパの学会であつて若い研究者の数は少くない。アメリカでの経験からすれば会議或は委員会とも思われるものであり、従つて全ドイツの有名な諸学者が一堂に会する機会でもある。

会はエデプト・聖書・旧訳聖書・セミテイステイクとイスラム・キリスト教的東洋とビザンチン・インド・イラン・アルタイステイクと中央アジア・シナと日本なる以上九部会に分かれた。発表時間は三十分乃至四十五分で、多くはこれを越え、発表者は午前九時より午後五時半まで十名乃至十二名にとどめられている。従つて発表者も充分な時間を持ち質問も純学究的である。何よりも司会者の形式をはなれ聴衆にまじつて坐している実質的な司会応答振りとは他国のこの種学会に見られなかつた司会振りであつた。時に司会者自身が自分の研究発表をやつてしまふという場面も屢々あつた。特にハンブルグのアルスドルフ・オランダのホンダ・チュービンゲン・テイメなどがそれである。売名的ニューロティックな質問はこのような確信に満ちた学会には見られない。反省すべき多くの点を見せられた。

九部会の中、インド学仏教学に関する若干を列記して

おらう。インダ学では、ハンブルグ大学におり、今ドイツに帰したナーメーの P. Thieme. Tübingen: Agastyā und Lopamudrā im R̥gveda; J. Gonda, Utrecht: Die Inspiration der vedischen Dichter; 及び M. Myarhofer, Würzburg: Der heutige Forschungsstand zu den Indoiranischen Sprachresten in Vorderasien; H. Goetz, Baroda; Das Emigrantenproblem in der indischen Kunstgeschichte. W. Ruben, Berlin: Die Welbedeutung Tagores; H. Hacker, Bonn: Zur Methode der geschichtlichen Erforschung der anonymen Sanskritliteratur; H. Härtel, Berlin: Bericht über eine Reise in das Gandhāra-Gebiet; R. Birwe, Köln: Panini I. 1, 46 etc. 仏教に関するものには F. R. Hamu, Hamburg; Zu einigen neueren Ausgaben des Pāli-Tripitaka; H. Becher, Mainz: Zur Frühgeschichte der Mahāyāna Buddhismus など、特に後者の仏陀年代論は P. H. L. Eggermant, Hamburg の Kanīṣka und die Saka-Ära を共に多くの議論をおきながらした興味ある発表であり、S. Biswas, Berlin が Vairākarāṇa-Saddhānta-Kaumudī の Vārtika などについて、W. Morgenroth, Greifswald が āṅe などについて Nominalstämme ai を

分析し、ジャイナノ權威 L. Alsdorf, Hamburg が Śūryasūtra を批判紹介した。以上の発表者以外に B. Schlerath, Frankfurt; P. Harsch, Zürich; W. Lentz, Hamburg; H. Hombach, Mainz; L. Vanden Bergher, Gent; K. M. Varma, Berlin; H. Härtel, Berlin; S. Lienhard, Stockholm; H. J. Pinnow, Berlin; H. Humbach, Mainz; O. Hansen, など既に、読者に熟知された諸学者三十五名の発表があつた。インド、ブーナにいたる若き学者 K. Bruhn, Hamburg がインドのアイコングラフィックについて未知の特色を指摘しつつ説明した美術論は注目を引いた。なお支那・日本部で、支那仏教に於ける神話・哲学・宗教を発表された W. Liebenthal は、永年インド・サンチニケイタン大学で教へ、来日したこともある老教授であるが、母国のハム市に帰り、全く健康を回復していた。本会議中、オーストリアのフラウワルナー及びハイデルベルクのペーリ学者で知られた H. Kopp に再会し得た。フラウワルナー教授とは特に談合の時間を持ち、オーストリア・ウイーンでのインド学研究所について聞くことが出来た。一九六〇年開所した本研究所は現在わずか数名の学生しかなく、経済的に苦面しており、而もバルカン地方の経済事情はその苦

悩を解決せしめまいと言ふ。世界各国で隆盛になりつゝある中国・日本研究もオーストラリアでは有難いと彼は言つた。彼は Landmarks in the History of Indian Logic; Mīmāṃsāśāstram 1, 1, 6-23 等の著作を発表してつた。此の国の唯一の学者でもある。彼の最近の論項 Geschichte und Aufgaben der Wiener Indologie, Anz. Ph. 1961 So. 4 はウイーンの十九世紀初頭よりの学問系統を Anton Bollen, Friedrich Müller, Georg Bühler, Leopold von Schoeder, Bernhard Geiger などのつづきで。シャイナ研究で有名な Alsdorf (コンンブルグ) は仏教に就つて Beiträge zur Geschichte von Vegetarismus und Rinderverehrung in Indien (A. D. W. und d. Lit. 1961. Nr. 6) 及び最新の論文 Aśokas Separatedikte von Dhauri und Jaugada (Akademie d. W. und d. L. 1962 Nr. 1) とつと興味ある論文を書き、同じくコンンブルグのトルロウのガバーン (A. von Gabain) 教授は仏教でつづつ Die alttürkische Version eines Werkes der buddhistischen Vaiśhāṣika-Schule I-II, 1957-61 を完成した。一九六一年再び合つた時、女史は有部教義の研究に手を入れた旨を述べていた。

序に、英国について一言すれば、ケンブリッジのコー

タン語研究の H. W. Bailey、オックスフォードの T. Burrow、ロンドン大学の中国学の D. C. Twitchett、及びロンドン最初の日本学教授 Daniel とケンブリッジの Ceadd は日本語を教へ、オックスフォードの Hawres は中国語を教へている。ロンドン大学では Simon 教授引退後、Beasley が極東部長となり、インズ学部長 J. Brough はガンダーリ法句経の出版 (The Gandhari Dharmapada 319 p.) を完成、又 A. Karosīhi Inscription from China (BSOAS, XXIV, 3, 1961) なる論項を出版し、サンズクットを J. E. B. Gray; V. I. Joshi; J. F. Saal と共に講じている。又、インド言語学では D. Friedman がいる。これらの充実したスタッフを持つ東洋アフリカ研究所では R. H. B. William のプラクリット、P. S. Jaini のペーリ語を初め現代インド語が講ぜられている。本研究所は欧米を通じた研究所の中で最もユニークな存在である。

Jaini は P. T. S. から珍本ミリンダ・パンハ・テーカーを出版した。これはデนมマークの王室図書館所蔵のテーカーである。同氏は筆者が一九五四年滞印中に見せられた永年苦心した校訂本 Abhidharmadīpa を遂に世に出した。一九五九年の出版となつているが、実は

一九六一年始めて世に出た。この梵文は *Dīpakara* 作とせられ、その系統は衆賢の順正理論・顯宗論をうけて述作されたもので、世親への反駁と数論への理解もかなり詳論されている。現在世親と衆賢の論詳が究明せられ世親の有部理解が批判せられんとする学界の新しい傾向を顧る時有力な証拠を恵与する好古の資料である。これによりアビダツマ研究の新分野が開拓されるであらう。

ロンドンのパーリ協会はリス・デーヴィズ更にステードの後をうけてその会長に推されたのもで依然として目ざましい活躍をしているホーナは現在一九六二年一月より、インド・セイロンに研究旅行中であるが、最近の通信によればアビダツマの諸種のティーカを発見したといわれる。女史のミリンダ・パンハ英訳は印刷校了であり又、待望のアビダツマ・マーティカーの註 *Mohavino-danti* 及びセイロン・ビルマ・タイの歴史書 *Jinakalamali* を本年一九六二年世に出した。又、一九五二年以来続刊されているパーリ・コンコルダンスは第三分冊まで世に出で、更に第二巻の残りと第三巻目が印刷中である。ホーナの言った如くパーリ写本ではラングーンの *The Advanced Institute of Buddhist Studies* とロンドンハーゲンの *The Royal Library* が最も充実している。ロン

ドン大学図書館の *Pearson* も同意見であつた。私の在米中、ラングーンからは *Wien* がハーバード大学へ留学していた。

世界仏教学者の中で最も活動的な学者の一人として、*E. Conze* の名は不朽の光を投げかけている。般若經に関する幾多の論文・著作は全く独自の文献学的並びに哲學的分野を切り開いた。即ち、著書としては般若經研究だけでも八冊、論文は二十数種にわたる。最近のものとしては、*Buddhist Wisdom Books 1958, Aśṭasāhikā Prajñāpāramitā, 1958, The Gilgit Manuscript of the Aśṭadasasāhikā Prajñāpāramitā, 1962* 等があり、最も新しい論文 *The Mahāyāna Treatment of the Viparyāsas, Orient Extremus, 9. Jahrgang, Heft 1, 1962* に於ては四顛倒を般若・中觀・瑜伽の諸系統を中心として論究し、興味はあるアスキクトを与えている。なお彼の作成した現存般若經全部にわたる梵藏英総索引は老大なものだがその秘蔵するものを数年前、在歐の時、私はその全マイクロの恵与をうけて感謝している。今度はその総索引の一部を中心に *Materials for a Dictionary of the Prajñāpāramitā Texts* の題下にインダのラダフ・ピラ教授らの *Satapitaka* 第二十七巻と

して出版されるがその日が待たれる。

次に北歐諸国について一言しておく、元来、北歐については余り、レポートがないようであるが、従来、多くの学者が出で主として各界の草分けの役を果たした。パリ研究の Trencher, Andersen Smith, 或は梵語学のラスク更にオランダのケルン等諸大家の輩出した諸国である。デンマークのエベンハーゲンのケルケガー墓地に静かにねむるラスクの墓碑は訪れる者にサンスクリット学界史の跡をそぞろにしのばせる。序でに印象深き梵語でつづつたその墓碑銘を記しておくこともサンスクリストにとつて、むだではないであろう。その墓碑に先づ生年月日と死亡の日を記して、曰く

Rasmus, Rask

Foedt I Braendekilde D2November 1787

Doed I Koebenhavn D 14 November 1832

nāstyudyamasamo badhuḥ kurvaṇo nāvasīdaiti

(努力にまかざる友なし、精進する者は沈まず)

と、案内してくれた Hermann Kopp 博士 (ハイデルベルク) がこれに与えて口づさんだドイツ語はラスクの言葉に劣らず、美しいそして重厚な言葉であった。

曰く、Es gibt kein Freund gleich der Anstrengung.

Der Handlunde geht nicht unter 云。

デンマークの生んだ実存哲学者 Kierkegaard (ケルケガーと発音する) の墓と共に静かなフリートーフにその影をおとしていた。ゲーテがファウストの中で言つた言葉「努力して止まざる者のみ救はれる」という詩句と一脈相通する偉大なる人々の最後のはなむけの言葉ではあつた。

これらの諸学者がインド学研究の始祖であつたが、その美しい伝統の上に現代北歐のまどらかな研究の夢が夢みられている。オランダのライデン大学にはサンスクリット及びドラヴィド・インド文学の権威カオペル(Kuyper)又、インド・イラニステイックを編纂している de Jung がパリより移つている。ウトレヒト大学のジャワ文学・ベルジャ及びアラビア研究で名高いホンダ (Gonda) 教授とはドイツのゲッティンゲンの学会でも会うことが出来た。アムステルダム大学には Hwesterman がヒンディー及びインド史を講じ、バットナン (Buytenen) は現在シカゴ大学にうつりラーマスジャを講義している。スウェーデンではウプサラ大学で注目すべき研究をしている Simonson がおり、インド仏教・特に梵藏訳の方法論的研究に新分野を開いた。彼の近著 Indo-Tibetische

Studien を初め、*Orientalia Suecana* に出た論項 *Samskrit na, Tibetan na yin* 及び *Boobachtugen über Bedeutung im Eka in einigen philosophischen Texten* 等がそれを実証している。そのライブラリーはデンマークの *Royal Library* と共に北欧で最も完備した図書館である。次にデンマークではコペンハーゲン大学の言語学者 Hans Henderiksen が現代インド語方言を講じ、その著 *Syntax of the Infinite Verb-forms of Pāli* はパリー語のシンタクス論として初めての試みとして貴重である。彼の弟子 Moeller-Kristensen は王室研究所でパリー語大辞典編纂に従事し、他方アルトハ・シャーストラ研究によつて、王室アカデミー賞をうけた逸才である。Oriental Comparative Religion の会長 Busehart 及びコペンハーゲン大学でチャムット学を出講している Haath が *Royal Library* に在る。図書館の写本カタログの旧版は近く改補されて限定出版せられる。ここで筆者はパリーのアッタサーリニーのアヌーティーカーに關する多くのマイクロをうる事が出来たが Dr. Haath の援助を謝したい。

最後に、デンマーク王室学士院 (*Royal Danish Academy*) で行われている国際的パリー語大辞典編纂事業

について一言しておこう。この仕事は国際学士院連合と国際人文科学協議会の支援の下で行われ各国からパリー語・言語学者の協力をえてすすめられている。デンマーク学士院を本部とするが、常任のメンバーには L. L. Hammerlich, Pauly, Kopp, Moeller-Kristensen, Bollée, Henderiksen 諸氏が在る。Pauly 夫人は既に P. Tuxen と共に論項 *The Parable of the Climbing Juggler* を出している如く、ヴェルマント研究でも造詣深く、又、数種の校訂本 P. H. S. をより出している H. Kopp 博士、ブラフマナ研のオランダ人 Bollée (著書 *Śaḍvīṃśa-Brāhmana, Urecht*) がパリーの仕事に献身している状況は他では見ることの出来なかつた調和のとれた協力体制であつた。各種の資料の中で最も難解なのは V. Trenckner の MSS. 々 *Anderren* の *Radices Linguae Palicae in ordinem etymology cum redacta* (12 volumes) 及び Geiger の slips である。Geiger と本事業の關係については未刊の *A Critical Pāli Dictionary Vol. II. part 2* に掲載予定の Heinz Bechert (Mainz) の論項 "Wilhelm Geiger, July 21, 1856 September 2, 1943" に詳論されるであらう。本辞典の一つの特長は資料を従来のパリー辞典の如く単にニカーヤ・小部・

ジャータカに限らず特に、アビダツマの諸註釈を網羅し且つ言語学的立場・意味の限定とその批判が加えられているという点である。コンコールドダンスと違つた協力者の学殖に基づくもので或る意味で *individualistic* な研究の成果であるということが出来よう。一九二四年より現在まで第二巻第一部 *adikappika* まで出版され、現在第二部 *adi-kamma* より *Möller-Krisensen* の力作になる *āpatti* までのゲラ刷も校了した。全八巻の完成までに半世紀を要するまさに斯界に於ける二十世紀最大の辞典となるであろう。筆者は学士院の編纂部で一九六一年八月より五十日間この難解な仕事の一部を引き受けていた。忘れてならないことはアメリカに於けると同様に、デンマークでもまた、この学士院を支えるために経済的基盤が社会の中にもり上つているということである。即ち、デンマークのカールスブルグ財団がそれである。この財団はクリスチャン四世以来デンマーク文化に強力な推進力を与えている。

## むすび

以上、欧米の研究所・学会を叙述して直ちに気付くことは、諸宗教研究成果の底辺が社会の思潮と経済機構と

密接な関連を持つていることである。この底辺の存在からして次の二つのことが考えられる。第一に歴史がないといわれるアメリカであるが、それ故にこそ却つて現在を基点とした歴史創造へと力を向けている。アメリカによる武器政治以上にこの歴史の創造への迫力は古いヨーロッパに対して強い反省をうながしている。このことは第二回目の渡欧の機に会つた多くのドイツ人学徒自ら述べていることであつた。第二は欧米では共に文化が積極的な庶民の経済機構によつて支えられている点で一致するが、アメリカでは更にそれに加えて、逆に文化は同時に経済生活を支えるものでもなければならぬという生活信条に於てヨーロッパより一層庶民的であると思われる。アメリカに於て日本社会に内在している如き身分制的或は家長的孤高癖が没落しているのも、或はまた、デカルト・カント・ショーペンハウエルを素材とするヨーロッパ哲学が単なる地域的哲学としてしか意味を持たないと言われるのも、換言すればかかるヨーロッパ的エリートも、現在から未来につらなるアメリカ的世界的な創造性を思う時、かなりの変貌を強いられるであろう。北欧に於けるエリートを尊ぶ停滞的精神生活も世界思潮の上でどれだけの意味を持つかが今や新たに問われねばな

らない時に立ち至つたようである。

この欧米相互のかわり合いの世界へ日本の存在意味を挿入せしめてみるならば、次のように言うことが許されるであろうか。即ち、日本が従来、果して来た海外文化摂取の過程は遣随使以来、単に同質的文化の輸入交流に過ぎなかつた。然るに今日、アメリカとの接触は言うまでもなく異質文化の交流と言へる。それだけでなく従来の輸入交流は内部的人間形成から始めて行き次第に外部的社会構成へと改革が進められて行つた。然るに、現在に於ける異質文化との交流はこれと逆に、先づ外部的社会構成機構への影響から始まり、内部生活へとその進路を向けて来つつあるということである。

かかる交流の現段階に於て、アメリカの関心は東洋に於ける歴史の精神を正しく理解せんとするところにある。それによつてアメリカの歴史創造へのエレガントとして東洋の歴史精神をうけ入れて行くことになるであろう。日本の側から言えば、日本社会構成—学界もそれに支えられているが—に内在している長老制の要素を払拭し、個人の能力を媒介とした文化と経済社会の緊密な連滞を促進せしめることにあるということになるであろう。文化と社会を結びつける個人の能力が直接的に、且

つ全面的に浮び上るようになることが日本の国際性を信頼あらしめるもとである。このことは、必ずしも積極的証拠を上げるまでもなく却つて、間接的內面的な諸事実によつて既に明らかになりつつある。というのは国際的場面に於てイニシアティブをとるものは多くの場合見られる思惑的判定でなく、国際的水準による海外の研究機関による判定である。而もそれが日本の判定と多くの点で一致を欠いているという幾多の事実をもちや否定しえなくなつた。これに較べて、欧米諸国の間に行われる相互判定にはそれ程相互に落差はないということを我々は予め了解してかからねばなるまい。

この一部の報告を終るにあたり、私にアメリカに於ける学問的生活体験の機を恵み、且つ保護して下さつたブルライト委員会の諸氏と委員長 Boylan 氏、公私の恩恵を恵まれたハーバード大学の Tillich 博士夫妻、講義と見学を可能ならしめた Ingalls, Reischauer 両博士、ワシントン政府の Dr. Lam, Lovely、デンマーク学士院・ハンブルグ大学の Alsdorf, Bent'デンマーク学士院の Hammerich 諸博士の名を記して甚深の謝意を表したい。

(一九六二年一月)